

文明パラドックスの超克へ向けて

Toward overcoming the paradox of contemporary civilization

本学名誉教授 高 瀬 浄

1. 問われる現代社会 —いま何がどう問われているか—

現代とはどんな時代であろうか。すでに「モノの豊かな社会」になり、その社会をどう捉え直していくのか、それは単なる効率主義でも単なる成果主義でもなく、総じていえばポストモダンの時代といえるのでなかろうか。そこでは格差社会から成熟社会への転換、科学技術の機械論的支配や大衆化社会から如何に脱出していくかが問われている。それはすぐれてモノの世界より人の「いのち」や「こころ」の問題、あるいはニヒリズムの問題でもあろう。そのような社会状況や構造を一口でいうと「文化文明問題」（文化の矮小化と文明の肥大化とのパラドックス）ではないかと考えられる。

知のレベルでいえばそれは「知恵と知識の分裂」という問題ではないか。少なくともそれは主観的な確信と客観的な事実認識との分離を意味する。そのためにモノは豊かになっても、それがストレートに心を潤すことにならない。消費自体が浮遊化する。それはまさに現代における文化と文明の矛盾と言ってもよいものであろう。そのみならず現代の科学技術の最たるものはミサイル兵器や原子爆弾といってよいものであるが、それらは人命を助けるものでなく、人命を奪う殺戮兵器となっているのが現実ではないか。20世紀に起こった人間の大量殺戮が21世紀により大規模に起こる可能性すら否めない。まさに文明の逆説が指摘される所以でもあろう。

そのほか現代の文明社会はすでにゆったりした時間的流れが失われ、社会の強さや弱さが同居し、喪失と獲得とが葛藤する世界へと変容してきている。とりわけ現代のバーチャル・リアリティに見られるように、自然から離れた人間の精神上的の仮想現実の発達は右の脳より左の脳が主導しており、人間自身よりも無気質的な存在に向かっているように思われる。この点を最も象徴しているのが今日のアメリカではないか。アメリカ文明というケースから見る限り、私たち人間は余りにも予測可能な生き物として、画一化する欲求や欲望、希望や愚かさへと突き進む姿が見て取れるのである。心の砂漠化の問題がそれであり、この点がいま問われているのでないか。

歴史家ロナルド・ライト氏によると近代世界は余りにも「ヨーロッパという単一の文明がほかの文明を破壊し、それらに取って替わる等しい状態が進行してきたことの延長にある。ヨーロッパはその過程で肥え太りながら、一大工業文明へと変身をとげてきたところであり、その延長線上に現

代がある」というのだ。したがって、「1900年代はじめ以来、世界人口は4倍、人類が自然に与えた負荷の大まかな目安である経済は40倍以上にも膨らんでいる」(ロナルド・ライト著、星川淳訳『暴走する文明』NHK出版協会、2005年)。その意味で19世紀末から20世紀は科学に対し絶対的信頼の時代であり、それを疑うものは誰もいなかったといえる。

そのために現代人は見えるもの、大きいもの、強いものに目が奪われ、そうでない見えないもの、小さなもの、弱いものには目もくれなかった。しかし、現代は徐々に物質的豊饒に対する疑惑も生じるようになり、環境問題をはじめその袋小路がいまや大きな課題になり始めた。そのために良かれ悪しかれ価値観が大きく崩れ始め、現代の危機はまさにその点にあらう。すべてのピントを見えるものに合わせるのではなく、見えないものにピントを合わせて見ると、これまでと違った別の地平も見えてくるのではないか。身近なことでは作家山本周五郎の『さぶ』や宮沢賢治を回想してみることがよからう。

最近の人類学者の指摘によると、いま地球上には150万種を超える生物が存在するという。しかも人間自身を含めて地球上に生きる生命体は、いろいろな関係を相互共有し合うものからなる。まさに生物多様性の世界がそれである。他方、地球上にはいま5千を超える言語があるとも言われる。言語というのは人々の間のコミュニケーション、共通理解可能性を保証するシンボル体系のようなものである。人類はその言語を介し、共有することで人間集団の文化的な営みを成し遂げている。その意味で前者の生物多様性に対し、これは文化的多様性を意味するものにはかならない。それは異端ではなく多様性であり、総じて地球上のあらゆる現象は相互依存関係を共有するものからなる。その意味では分節的なものでなく、交互的なものである。それだけに脱皮や革新も多様なものでなければならない。ここに人類共生への道も拓かれる。現代人はそれに見合うように、いま何のために生きるかが改めて問われているのである。

2. 近代世界と近代科学 —問われる機械論的自然観—

それなら、そのような知恵と知識、確信と認識との甚だしい背離を大きく推し進めたのは何であったのか。それはなにより近代世界における分析的な科学知の飛躍的發展によるものである。デカルト的二元論からなる近代科学は機械論的自然観を原理としたものであり、その独走にあったのではない。顧みるに「かつて科学の万能性が信じられた時代には、神話から科学へ、あるいは魔術から科学へということが時代の合言葉であった」(中村雄二郎『哲学の現在』岩波新書、1997年)。人間社会の進歩が必然的なものと考えられた中であって、神話や魔術からの科学の移行は当然で自明なものとなされてきた。その過程で人間の理性は神とのつながりを弱め、次第に自律的なものになってきた。

その結果、人間は自然現象の背後にある形而上学的実体を問うことなく、自然現象がいかにあるかを実験と論証という方法によって把握し、ここに近代自然科学的認識が成立することになった。それによって実現された客観の合理化と主観の理性化が、デカルトの物体と精神、カントの客観と主観という形で結実することになった。かくして形而上学から解放される近代自然科学的認識、合

理主義の立場が肯定されてきたのである。

もちろん、そうした見方に対しヘーゲルなどは近代的自我、能動的で自律的な人間理性を、自然を創造する神にまで拡大し、近代自然科学的認識の批判を試みた（根井康之『近代的自然観と哲学』農山漁村文化協会、1984年、158ページ）。その点についてさらなる詳細は別の機会に譲ることにする。ただここで指摘しておきたいのは、ヨーロッパの近代史において哲学と科学は常に分裂し、両者は互いに相手を批判しあってきたということである。哲学者は科学万能主義を批判し、科学者は哲学的思弁を無意味なたわごとであると批判した。だが今にしていえることはかかる両義性の中にこそ、むしろ新しい知的刺激を生み出す新しい学問のあり方の萌芽を見ることができるところではないかと思う。

たしかに、顧みるに人類はいま自然との対話を求めて新しい試練の中にあるが、いまなお人間の挑戦は自然を超えたという状況にないのである。その後、科学の進歩と過信が今日のように「先行き不透明」で反省されるようになると事情が大きく変わってくる。かつてシューマッハーというイギリス学者は『スモール・イズ・ビューティフル』（小さいことは美しい）という本を書き世界的な注目を集めた。あるいは今より数年前、わが国のアニメ作家宮崎駿（みやざきはやお）氏が「千と千尋の神隠し」というアニメ作品で世界大賞を得て世界的な大反響を喚起したことを思い返してみることがよかろう。神話や魔術は近代世界であるべからざるもの、いかがわしいものとされて剃ぎ落とされてきたが、それがここにきてそうでなく、甦りともいえる事態を見せている。新しい時代に肉迫するには科学技術の成熟化に伴う合理性の中における非合理性の問題や、人間による無制約な自然破壊がやがて人類滅亡を招きかねないという危惧などの問題は軽視しえないのである。

いまのように大思想も大思想家も見えない状況のなかで、ある意味での歴史ブームが起ころつつあるとき、過去に生きる知恵に学ぶことから未来が見えてくることも少なくない。そこでは隠された現象の解説が求められる。自然と人間が有機的に結びついていた近代以前はそうでなかった。それが機械文明の大規模な発達によって、文明の逆説としていま見直されつつある。画家岡本太郎の見直し論などもその一つの例である。近代世界と異なる地平がそれである。そこに近代世界を超える新しい視点も試みられる。

たしかに近代世界は機械論的自然観—要素還元主義—主客分離による二分法的世界からなるものである。しかし1900年に16億人だった人類は20世紀末に60億人、21世紀の40年代遅くとも50年には100億人を超えると予測されている。半面、豊かな自然生態系は確実に崩壊に向かいつつある。いまや人間が外界を認識するという単純な直線構造にはなっていない。地上における人間の在り方が大きく問われることになる。いま地球上に住むわれわれにはあらゆる努力が求められる。自らの変革も避けられない。すでにニューサイエンスの思潮などがそれを示唆する。これまで見えないものが見直される。

幸い最近にはニューサイエンスの本が多数出版されるようになった。フルチョフ・カブラの『タオの自然学』は原子物理とインド哲学や禅の類似を論じているし、またJ. E. ラブロックの『ガイヤ伝説』…などもそうである。これらの提唱は論理的にすべて理解しようという理性そのものに限界のようなものが見え始めたことを意味する。そこでは科学的知識のみでなく、科学的思考への方法が問わ

れる。それはまた機械論的自然観にもとづく近代合理主義の独走の功罪といえるものであろう。全体としてのバランスを欠いてきたことにある。かつて人類がはじめて文化と文明を持ち始めた頃はそうではなかった。それがデカルト以来の二元論世界で疎外されてきたものにはかならない。宇宙時代を迎えた今日、科学と宗教の関係はむしろ深まることになるのではないか。その点がいま見直されつつある。

3. 人と自然との共生 —未来をどう生きるのか—

現代人はますます自然から乖離した生き方をしているが、半面、文明の逆説として共生的な生き方も問われる。人に限らず生物というものは個体だけで生きられるものではない。そこに見えてくるものが生物多様性の問題にはかならない。この生物多様性がいま急速に世界的に崩れ始めている。地球環境問題がそれを象徴する。今年の自然と人間の共生をうたうコスモス国際賞受賞者ロンドン大学ジョージ・メイズ教授によると「個体のレベルでは1300種の脊椎動物について、70年に比べて平均で約30%も減ることになった。種のレベルでは哺乳類の20%、鳥類10%、両生類の30%近くが絶滅の危機にある。一つの生物種が絶滅すれば何百万年、何千万年もの進化が失われることになる」という。そのほか気象変動による大気汚染、富栄養化は幅広い地域で生態系を大きく損ないつつあることが指摘されている（『環境エコロジー』『朝日新聞』2007年10月24日夕刊）。そこに現代文明の発展と崩壊という「文明のパラドックス」が見て取れる。

かつてニーチェは「神は死んだ」と宣言し、マルクスは「宗教はアヘン」だと主張したが、そこに残されたことはつまるところ「自然への回帰」ということではなかったか。それに対しフランスの文化人類学者レヴィ＝ストロースは『野生の思考』（1962年）を公刊し、「自然への回帰」を訴えた。それから50年後の現在でもこの『野生の思考』は多くの人に読まれている。それは何より「神話を創造する能力や芸術をつくり出す才能などを含めて、この〈野生の思考〉は、人間が何かを創造することができたり、またこの世界が巨大な情報体やコピーの集合である以上に生き生きした創造のプロセスそのものを直感するための、まさに能力の貯蔵庫のようなものであった」からであろう。彼にとって自然界というのは決してバラバラな存在でなく、有機的連関関係的なものからなるものであった。それゆえに、彼の認知する自然は単純な直線構造的なものでなかった。このような思潮の流れはやがてフランスの構造主義などにも継承される。そこでは文化を構成する言語、民族、親族といった要素も見直され、これまでの機械論的で二項対立的な図式は見直される。

かようなわけで現代人は自然の原点に立ち戻って考え直してみることも必要ではないか。そうすればこれまで見えてこなかったものも見えてくる。ある面で人間のもつ五感の世界なども見直されてくる（鈴木大拙『東洋的な見方』岩波文庫、2005年）。まさにエコロジー（ecology）の問題などもそうである。エコロジーという言葉はドイツの生物学者アースト・H・ヘッケルが1868年に家を意味するギリシャ語のオイコス（oikos）と学問を意味するロゴス（logos）とを合成して造語した生物学の一分野を意味するものである。生態系（ecosystem）という言葉はイギリスのA. G. タンス

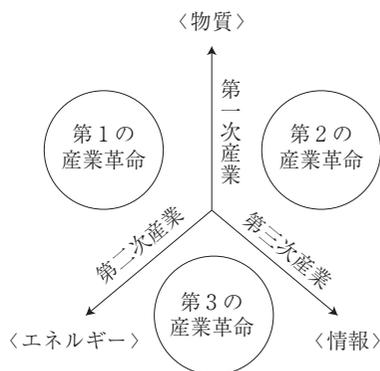
レーによって、生物とその環境のシステムとして最初に用いられた。その後1970年代に入った頃から、さらにディープ・エコロジー（deep ecology）という言葉なども多く用いられることになった（拙著『人間と自然の経済学』論創社、2002年、参照）。このディープ・エコロジーの思想は人間の内面の問題としてだけでなく、自己中心的な生き方を超え社会構造的な問題にまで及ぶものである。

したがって、一口に生態系といってもその内容は時代の中で変わってくる。それゆえに、今日では「エントロピー最小・アメニティー最大」を最終目標とするエコパラダイムを基軸とする文明社会の構築こそが期待されよう。この立場からすると文明とは「物質・エネルギー・情報」という三つの分野が多様化し、平均的に発達する社会がまず想定されることにある。それはこれまでのように一面的に機械論的自然観が独走するのではなく、自然の生態系をも重視していくことにある。とりわけ日本には一神教の国と異なって「神のお告げ」のようなものがない国柄である。

最近、ドーキンスという有名な生命科学者が、キリスト教を批判して『神は妄想である』という本を書いたが、神仏習合的思考の強い国ではそう単純ではない。「生命操作の可能性を追求する科学そのものが操作的介入の限界」を認識しつつあることも否めない（福岡伸一「生命のありよう・部分的操作には限界」『朝日新聞』2007年10月27日）。科学と宗教は決別するどころかむしろ科学の成熟化のなかで連携が深まっていく方向にあるのでないか。アーノルド・トインビーは生前最後の書の中で人間の生きる目的として「愛と英知と創造」をあげ、その最後に「生命の敬虔」をあげているのである（アーノルド・トレイビー著『未来を生きる』毎日新聞社、1971年）。「技術は私たちに、共通な生活様式に到達するための物質的手段を与えてくれますが、思想と理想まで提供できません」と指摘している。この提言は大変に貴重でないかと思う。

たしかに現代の「物質・エネルギー・情報」という文明の構造からみても、次のような経過を経てのことである（図参照）。図の「物質」は第一次産業の軸となるもので、農業や鉱業などの天然資源の獲得と開発がそれである。経済発展としてはプリミティブな段階がそれである。次いで「エネルギー」は石油や石炭などの発見などにより、各種のエネルギー変換技術も開発され、第二次産業からなる近代化が幕開けし発展する段階がそれである。この時代は「物質とエネルギー」との対応からなる重厚長大＝物質代謝過程の時代がそれである。現在はさらにモノやエネルギーの多様化することにもなって「情報」を軸とした各種の技術が開発され、第三次産業の段階がそれで、軽薄短小の時代がそれである。その上でさらに今後の地平は「エネルギーと情報」からなる生命代謝時代ではないのか。ここには改めて生態系や生命系の問題が浮上してくることもなるろう。

しかし、それらの諸問題は還元主義思考になじまないものが少なくない。むしろいま生態系を見直すこと



(図) 「物質・エネルギー・情報」による文明の展開

は要素還元主義が支配する科学の世界から排除されたものが逆に見直されることにもなる。したがって、エコロジーと文明の共生現象を誘発し得る場づくりが問われてくる。今後の文明時代を生きる上でかかるシステムをいかに再構築するかということが、わが国として最も重要な課題になってくるのでないか。なかんずく一番遅れているソーラー・システムやバイオ・エネルギーなどの開発が大きく見直されることにもなる。この際日本は生態系に恵まれた状況にあるといえるのでないか。

顧みるに日本列島は依然として国土の67%が山林からなっている。こんな先進国は日本をおいてほかにない。わが国は北は流氷から南の珊瑚礁まで亜寒帯から亜熱帯に及ぶ自然生態系からなる。その上降水量も豊富である。日本の降雨量は年平均1700ミリ、これは世界の年平均降水量750～1000ミリのほぼ二倍に相当する。日本の降水量の豊富さは土壌を潤すことにもなる。しかも北から南にかけて縦断する山また山、2000メートル～3000メートル級の山が陸続として連なっている。そのほか寒流と暖流などが日本列島を取り巻いている。エコロジーの面から見て日本の生態系は実に恵まれているのである。その意味でかつてヘッケルがエコロジーの研究課題として、当初すでに生物群集と共に共生や寄生を掲げていたことは、その時代から一世紀以上も経った現在のわれわれにとっても非常に意味深いものがあると思われる。エコシステムの知恵は改めて見直され、生命系や生態系の問題こそこれからの課題であることを指摘しておきたい。いまや地球という生態系こそが人類の共有財産といえるものでないか。

その意味を含めて最後に結びとして、西ドイツの初代首相アデナウアーによる「みどりの計画」を指摘しておきたい。ケルン市は人口約100万、機械・電気・繊維・化学工業などの生産地であり、ライン川を挟む一帯の中心都市として発展してきた。そのケルン市がいま森林に囲まれた「森の都」となっている。しかしケルン市は、もともと森に恵まれたところではない。歴史的遺産としても森でなかった。そのケルンをみどり豊かな都市に創り変えるため、市民の先頭に立ったのがアデナウアーであった。アデナウアーは、休耕地や放棄地を買収したり炭坑の採掘地を利用したりして、都市林や公園を造成し、市民のための保養地を確保した。その結果、市域の四分の一に当たる約600ヘクタールが見事な森に生まれ変わった。人口一人当たり公園面積約60平方メートルが実現したのである。この点は現在、注目して良いことでないか。

ちなみに日本の公園は、一人当たりにして4平方ヘクタール、東京は2平方ヘクタールに過ぎないのである。20世紀に損なわれた環境を回復させることは、「環境の世紀」として期待されている21世紀最大の課題のひとつである。研究者も市民、学校、行政などと連携するなかで、いま社会に対し「緑と生命の回廊」を見直していくことは大きな意義があることだと考えられる。この可能性を担っているのは何よりいま伸びつつある若い世代の皆さんである。若い皆さんに絶大の期待と深い信頼をよせて私の話を終わりたい。